

上部遺跡発掘調査報告

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第30集

1990

津山市教育委員会

上部遺跡発掘調査報告

市道成名39号線改良工事に伴う弥生時代集落の調査

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第30集



1990

津山市教育委員会

序

津山市草加部地区は、吉井川の一支流である加茂川の西岸に位置し、その名前が示すように田園地帯として、古くから知られてきました。その落ちついたたたずまいは、近年、草加部工業団地に代表される開発によって、急速な変貌をとげつつあります。

これらの開発に対し、本委員会では埋蔵文化財の保存に取り組んできました。草加部工業団地の造成に伴う発掘調査の実施など、どうしても現状のままで保存することが不可能なものについては事前の発掘調査を行なってきています。これらの調査成果の蓄積により、草加部は考古学的調査の比較的進んだ地区として地元はもとより、原始・古代の美作の歴史を考えるうえで欠かすことのできない資料を提供しています。

本発掘調査も一連の開発に伴う交通の緩和を目的とする道路建設にかかるもので、限られた範囲の調査ですが、弥生人の生活について新たな資料を提供するものです。

調査に際してよせられました地元ならびに関係者各位の御協力に対し、深甚の敬意を表するとともに、本書が地域の歴史を掘りおこすための資料として活用いただけるよう希望します。あわせて、近年失われつつある歴史資産の保護について、なお一層の御理解と御協力を願ってやみません。

平成2年3月

津山市教育委員会

教育長 萩原 賢二

例　　言

1. 本書は、岡山県津山市草加部に所在する上部遺跡の発掘調査記録である。
2. 本発掘調査は、津山市建設部が建設を計画した市道成名39号線の改良工事にさきだつ事前調査で、昭和63年に津山市教育委員会が確認調査と本調査を行なった。
3. 採図中の方位は磁北である。また、レベル高は海拔高を示す。
4. 本書Fig. 1 「位置図」は、建設省国土地理院発行 2万5千分の1 地形図（津山東部）を複製したものである。
5. 本書で用いた遺構の略号については次の通りである。
S H：住居、S B：掘立柱建物、S X：住居状遺構あるいは不明遺構
6. 本書の執筆と編集は安川豊史があたり、遺物整理に日笠月子の協力を得た。
7. 出土遺物、写真および図面類は津山弥生の里文化財センターに保管してある。

目 次

序

I 調査経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 位置と環境	2
II 調査の概要	5
1 A 地区の概要 (遺跡)	5
2 A 地区の概要 (遺物)	12
3 B 地区の概要	19
III ま と め	21

挿図・表目次

Fig. 1 位置図	3	Fig. 9 S B104・109実測図	11
Fig. 2 調査区域図	4	Fig. 10 土器実測図	13
Fig. 3 遺構配置図 (A 地区)	5	Fig. 11 土器実測図	14
Fig. 4 S H101実測図	7	Fig. 12 土器実測図	15
Fig. 5 S H102実測図	8	Fig. 13 土器実測図	16
Fig. 6 S H103実測図	9	Fig. 14 石製品・鉄器実測	18
Fig. 7 S H111実測図	10	Fig. 15 B 地区遺構・遺物実測図	20
Fig. 8 S X108実測図	10		

I 調査経過

1 発掘調査に至る経過

津山市草加部地区の市道成名39号線の改良工事計画が明らかになったのは、昭和61年4月のことであった。これは、草加部工業団地と大規模農道とを結ぶ路線の改良工事で、当時、飽和状態にあった草加部工業団地への物流および通勤の便を改善しようとしたものである。工事を担当する津山市建設部土木課から埋蔵文化財に関する協議をうけ検討した結果、工事予定地の隣接地で東蔵坊遺跡などの集落跡が知られていたほか、路線予定地の北端部は、周知の遺跡である上部遺跡にかかることがあきらかになった。上部神社を一周する道路岸面には弥生時代とみられる住居址等の遺構がかねてから露出していたことから、事前に確認調査を実施することとした。当該道路沿線にあたる草加部前田地区では、本道路工事とあわせて農業基盤整備事業を実施する計画であったため、この確認調査も同時に実行うことになった。

本委員会は、昭和62年11月に対象地一帯の確認調査を実施した。その結果、路線内では上部神社境内周辺で弥生時代集落を予想通り発見したほか、前田地区でも弥生時代および中世の集落址と考えられる遺跡を発見した。上部神社周辺の弥生時代集落址、つまり上部遺跡は南北の2地点に分かれています。北側をA地点、南側をB地点と呼ぶこととした。B地点はA地点から東に入る浅い谷を隔てた丘陵上に位置するが、周囲を道路で断ち切られており、さらに表面はかなり削平を受けているようだ。遺跡の残存範囲は東西6m四方をはかるにすぎなかった。このため、B地区についてはこの機会に遺構を完掘した。この確認調査結果を受けて、本委員会は工事担当課との保存協議にはいったが、遺跡の存在する地点はいずれも削平の対象地で、工事計画上、現状保存は不可能との結論に達し、工事に先立って事前調査を実施することとした。発掘調査は津山市教育委員会が主体となって実施した。調査体制および調査後の整理にあたった体制は次のとおりである。

調査主体 津山市教育委員会

調査責任者 福島祐一→萩原賢二（津山市教育委員会教育長）

調査担当 津山市教育委員会文化課

事務担当 内田旗雄→須江尚志（参事兼文化課長）、稲山三千穂（文化係長）

発掘及び整理担当 安川農史、日等月子

発掘作業員 田上正範、藤田 滉、藤田 要、竹内正二、今井静代、今井龟久江、

菅田八重子、田上いつ子 延原 宏、橋田みどり（学生）

2 位置と環境

上部遺跡は、津山市街地の北東約7.5kmに位置し、津山市を貫流して瀬戸内海に注ぐ吉井川の支流である加茂町と、津山から若田郡加茂町に至る谷間にさまれた南北に延びる丘陵上に存在する（Fig. 1）。この丘陵は開析がすんでいて、いたるところ樹枝状を呈するが、本遺跡の位置するのは丘陵中央部の高まりを中心とする一帯で、推定範囲は東西260m、南北280mをはかる（Fig. 2 破線範囲）。今回の調査地点は遺跡の中央やや西寄りの地区で、ちょうど遺跡を縦断する南北方向の大きなトレンチを入れたかたちとなる。

津山盆地の北半部には、中国脊梁山地の南麓から南に延びた標高150m内外、平地との比高差20~30mの丘陵が発達しており、丘陵と丘陵との間は現在もなお良好な水田地帯となっている。津山地方の弥生時代集落遺跡の多くはこうした丘陵状に立地することが多いが、本遺跡もまた同様の立地を示す一例である。上部遺跡の周辺に存在する弥生遺跡として、東藏坊遺跡（文献1）、鰐込遺跡、桶荷遺跡、丸尾遺跡があげられる。これらのうち、東藏坊遺跡が中期から後期後葉にかけての集落遺跡。他はいずれも中期に属する集落遺跡である。本地区では草加部工業団地の造成を契機とする埋蔵文化財の調査が比較的進んでいるせいもあるが、弥生時代においては集落遺跡の密集地帯といえる。こうした弥生時代遺跡の調査において、縄文時代に属する遺構・遺物もわずかながら検出されている。東藏坊遺跡B地区における早期の土器・石器、鰐込遺跡における落し穴遺構がそれである。

古墳時代の遺跡は、いずれも後期に属する。木棺直葬の主体をもつニレノ木南古墳、丸尾1号墳、片山古墳群から、横穴式石室あるいは箱式石棺に近い形態の堅穴式石室を主体にもつ附込古墳群まで、およそ6世紀の前半から7世紀中葉まで、単独あるいは数基からなる古墳群が谷筋に面して点在する。古墳以外にこの時期の重要な遺跡が存在する。炭窯と製鉄炉をもつ緑山遺跡（文献2）である。7世紀前葉に推定されるこの遺跡とほぼ同時期の住居址が東藏坊遺跡で発見されており、住居址内からは鉄滓が出土した。本遺跡からも鉄滓の出土をみており、緑山遺跡との関連がうかがえる。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の動向は、分布密度の差はあれ津山の丘陵地帯における平均的なあり方を示している。

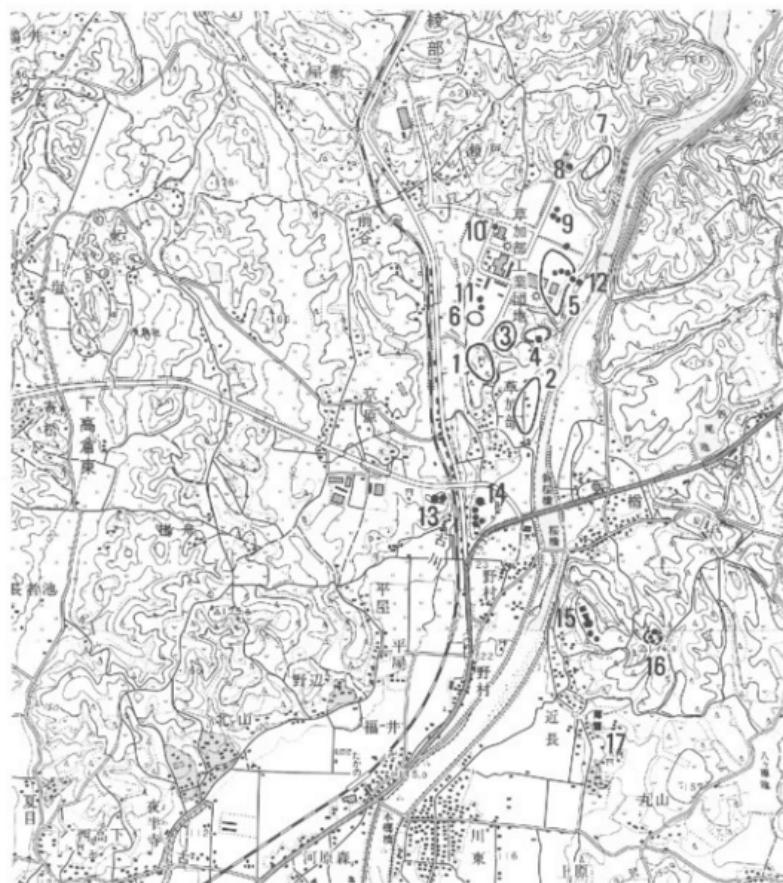
文献1 安川豊史「東藏坊遺跡B地区発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集』1981

文献2 中山俊紀「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集』1986

文献3 行田裕美「荒瀬古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集』1983

文献4 中山俊紀「才ノ崎古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集』1988

文献5 中山俊紀・漆 哲夫「才ノ崎遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』1985



名 称	時 期	考	名 称	時 期	考	
美濃道跡	1. 上瀬道跡 2. 楠原道跡 3. 東武古道跡〔A地区〕 4. 東近畿道跡〔B地区〕 5. 飯込道跡 6. 丸尾道跡	弥生中期 弥生中期・半世 弥生中・後期、古墳後期 弥生中・後期、古墳後期 弥生中期 弥生中期	本 番	埴堀道跡	10. ニレノ木東古墳 11. 丸尾吉埴群 12. 舞古墳群	古墳後期 本番古墳 古墳後期 本番古墳、横穴式石室 古墳後期 横穴式石室、堅穴式石室
	7. 緑山道跡 8. 緑山IA 1号墳 9. 佐瀬古墳群	古墳後期 古墳後期 古墳後期	印鑑中	13. 風魔古墳群 14. 片山吉埴群 15. 近長四ツ塚古墳群 16. 才ノ崎古墳群 17. 大垣原古墳群	古墳後期 古墳後期 本振直郭類 古墳前期 古墳後期 文献4 弥生後期 文献5	
			文獻1	10. ニレノ木東古墳 11. 丸尾吉埴群 12. 舞古墳群		
			文獻2	13. 風魔古墳群 14. 片山吉埴群 15. 近長四ツ塚古墳群 16. 才ノ崎古墳群 17. 大垣原古墳群		
			文獻2	10. ニレノ木東古墳 11. 丸尾吉埴群 12. 舞古墳群		
			文獻3	13. 風魔古墳群 14. 片山吉埴群 15. 近長四ツ塚古墳群 16. 才ノ崎古墳群 17. 大垣原古墳群		

Fig. 1 位置図 1 : 25,000

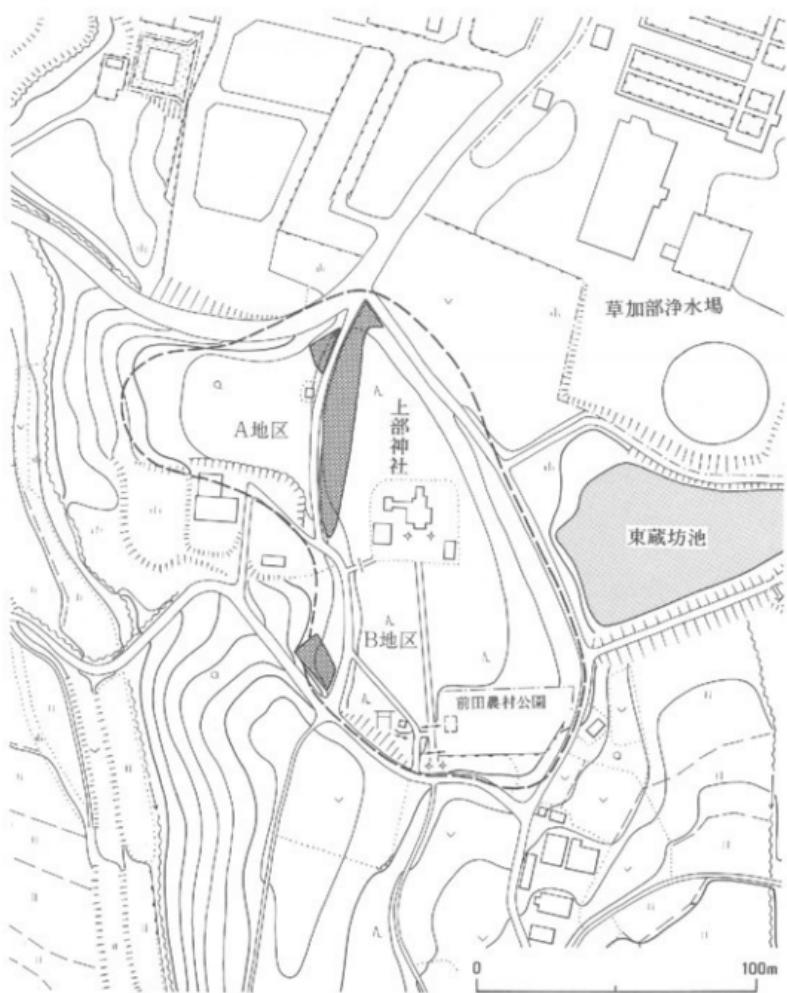


Fig. 2 調査区域図 1 : 2,000



II 調査の概要

1 A地区の概要（遺跡）

上部神社の西側には南北に走る幅2m程の里道が存在した。本地区の主要部はこの里道の東側に沿った南北約85mの区間で、調査区の東西幅は、最大の箇所で約12mを測る。道を隔てた西側のほとんどは、工事区域外となっている。ただし、北部については、本遺跡の西側を南北に走る県道津山加茂線から、遺跡北方に存在する草加部工業団地につながる既設の道路崖面に住居址の存在が認められていたため、里道西側にも小さな調査拡張区を設定した。

調査は、重機によって表土を除去したのち、調査区全面に5mメッシュの方眼座標を設定した。本地区的最高部はE13付近に存在し、標高約154.5mを測る。ここから北は水平に近いなだらかな斜面で、南方は比較的急な傾斜を呈している。

調査区のほぼ全域から、縄文時代から古墳時代後期にかけての遺構・遺物を検出した。遺跡の主体を占めるのは、弥生時代後期の集落跡でこれらの調査区の南側約3分の2程の範囲を占める。これに対し、弥生中期と思われる遺構は調査区の北方に限られる。縄文時代の遺構として落し穴とみられる1基の土坑を検出した。古墳時代後期に属するのは遺物に限られ、それらは弥生時代住居(SHI02, 103)の埋土中から検出されたもので、調査区内に遺構は存在しないも

Fig. 3 遺構配置図（A地区）

の、付近にこの時代の遺構が存在することを示している。以下にA地区で検出した遺構を列挙する。

遺構番号	グリッド名	種 種	時 期	備 考
SH101	D14, D15, E14, E15	住居址	弥生時代後期	
SH102	E8, E9, E10	タ	タ	
SH103	D7, D8, D9, E7, E8, E9	タ	タ	
SB104	C8, D8, D9	建物址	タ	
SD105	B6, C6, C7, D6, D7, E7	溝	タ	SH103の付属施設
SK106	E14, E15	土壤	縄文時代?	
SX107	D15	住居状遺構	弥生時代後期	
SX108	E16, E17	タ	タ?	
SB109	E12, E13	建物址	タ	
SX110	E15	住居状遺構	タ?	
SH111	D2, D3	住居址	弥生時代中期	
SX112	B4	住居状遺構	タ?	

表1 A地区遺構一覧表

以上のはかに、建物にまとまらない柱穴群が調査区のほぼ全域から検出されたが、これらはかならずしも一様な分布を示さない。北からE2区、D5区、D11区、D13区をそれぞれ中心とする4箇所の集中を認めることが可能である。

SH101 (Fig. 4)

A地区南端近くにある円形住居址。西側半分を里道によって破壊されている。また、全体に削平あるいは流失を受けていて、壁溝および床面をわずかに残す程度で、遺存状況はあまりよくない。1回の拡張が認められる。当時のものは、直径7mを測り、6本柱と推定される。拡張後の住居は直径11mに達し、これには4次にわたる建築ないしは補修が認められる。拡張当初は、拡張前の住居壁溝近くに柱穴を配し、柱穴間をつないだ溝により内外に段差をつくってベッド状施設をもうけている。この際、先行する住居床面に土をいれ、張床を施す。この時の主柱数は8本程度と推定される。その後、このベッド状施設を外方に拡張し、それに伴い主柱を移設する。ベッド状施設拡張後の主柱は2回の補修が認められ、10本ないし12本であったと考えられる。

里道によって削られた法面近くには隣接する2箇所の中央穴が存在する。このうち、南西のものが拡張前の住居に、北東のものが拡張後の住居にそれぞれ付属する。その他の拡張後の住

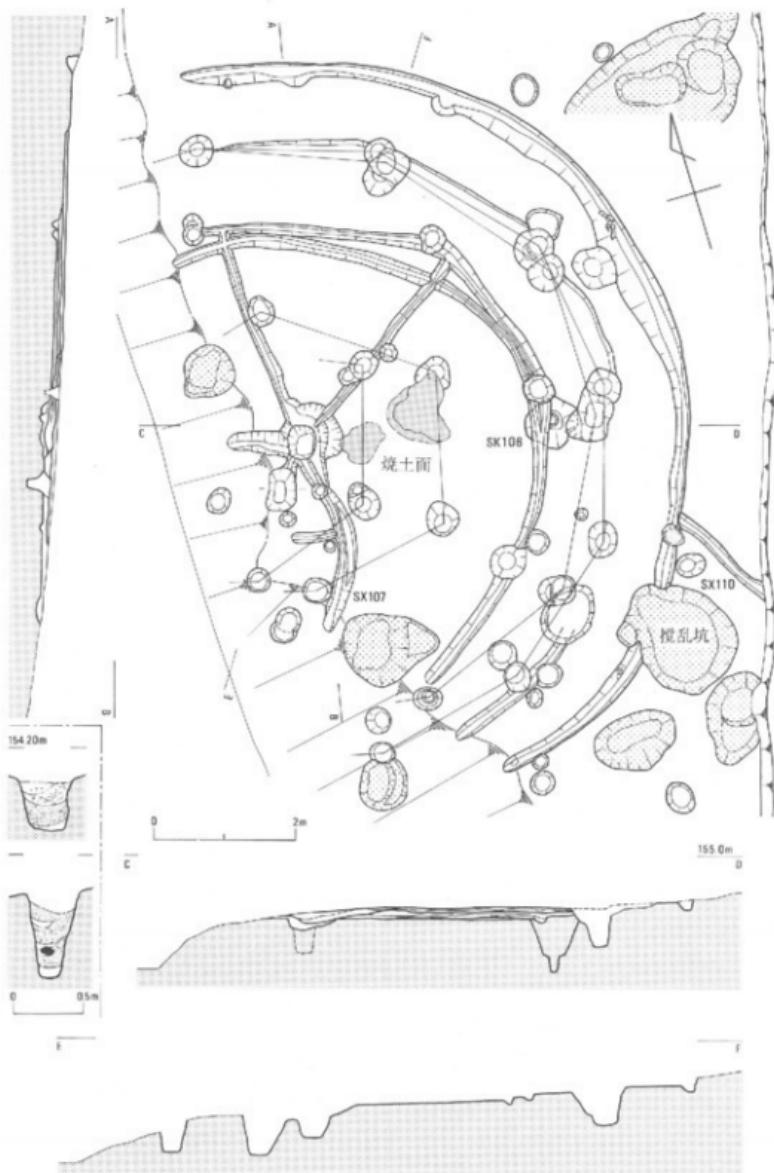


Fig. 4 SH101 実測図 1:80

居の付属施設としてベッド状施設から中央穴に延びた2本の床溝と、中央穴周辺に2枚の焼土面が存在する。本住居址からは土器の細片が出土したが、実測可能なものはなかった。弥生後期に属する。

本住居と切り合う遺構とし、SX106、SX107、SX110がある。SX107・SX110はいずれも住居址あるいは住居状遺構で、SX107はSH101に先行し、SX110は後行する。両者とも壁溝状の溝を残すだけが、SX110では床面に置かれていたと思われる偏平な自然縁が溝に接して出土した。SK106は落し穴とみられる土壙で、SH101に先行する。土壙内から遺物は出土していないが、土壙埋土は他の弥生時代遺構にみられる暗褐色土とは異なり黄褐色を呈する。繩文時代のものと思われる。直径72×65cmの不整円形の平面形をなす。現状の深さは約60cmで、底面からさらに径15cm、深さ25cm程の小穴を穿つ。この小穴の底面径は9cm程なので、その程度の直径の杭が立てられていたと考えられる。

SH102 (Fig. 5)

A地区のはば中央に存在する円形住居。はば3分の1を調査し、残りは東側の調査区外に続いている。調査箇所での最大径7.2mを測り、6本柱と推定される。柱穴を結ぶ段差を削り出すことによってベッド状施設をもうけている。ベッド状施設は、北方を除き住居を一周すると考えられる。

住居内の壁溝近くから3個体の土器が出土した。本住居はSH103が埋まった後に作られている。

SH103 (Fig. 6)

SH101と並ぶ大形円形住居で火災を受けている。ちょうど西側半分を調査した。中央穴と、そこから住居外に延びる排水溝をもつ。排水溝のうち、住居外に位置する部分をSD105とした。住居は1回の拡張がおこなわれ、排水溝から南の部分は拡張するが、溝以北の壁体部分は共有している。当初の住居は直径9.5mを測り、拡張後には10.8mに達する。拡張前の壁中には、杭跡様の小穴が多く検出された。おそらく、壁を構成した板壁等のおさえであろう。主柱数は8本ないし10本と推定される。住居床面および埋土中から、かなりの量の土器が出土した。調査区の東側壁面の観察によれば、本住居址およびSH102の埋没の途中、浅い窪みが形成され、そこに暗褐色土が堆積している (Fig. 6 左断面図の網部分)。この土層からは7世紀前半の須恵器片とかなりの量の鉄滓が出土しており、調査区外に当該期の遺構の存在することがうかが



Fig. 5 SH102実測図 1:80

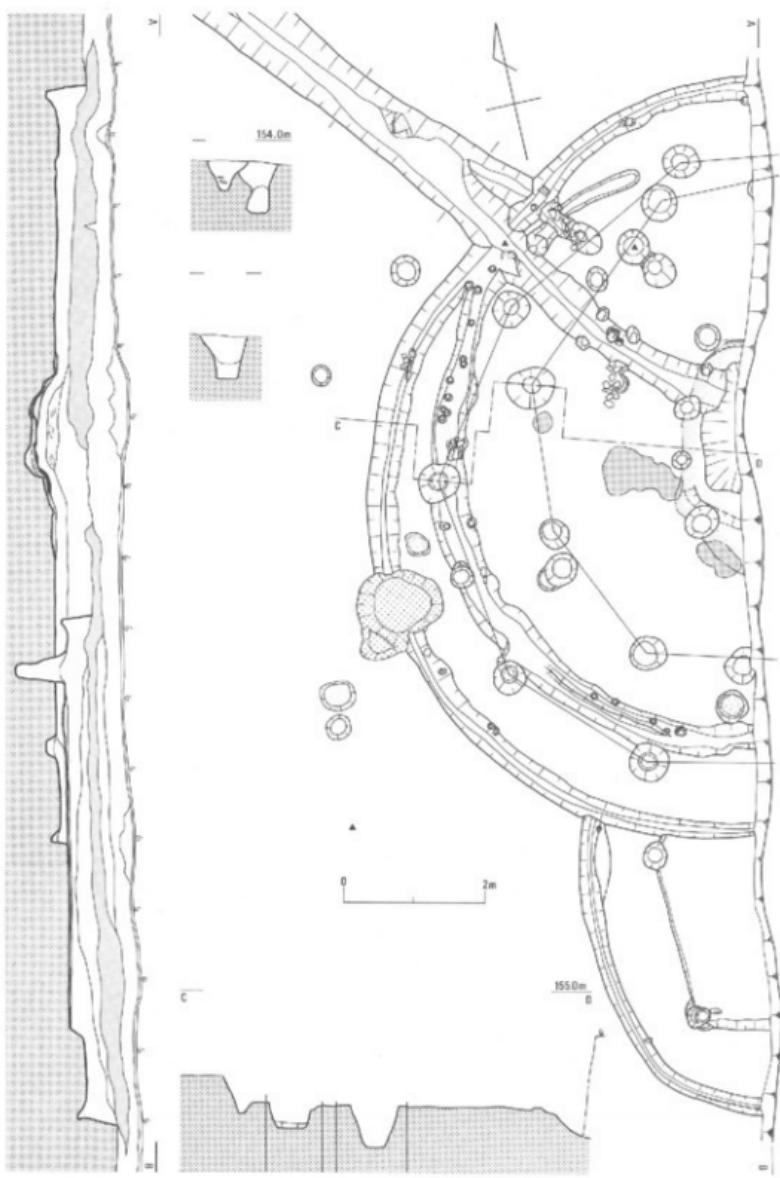


Fig. 6 SH103実測図 1 : 80

える。

S105は、住居から北西に延びており、現状で長さ12.5m、幅0.9m、深さ0.6mを測り、断面形は逆台形状を呈する。溝の先端は、里道をこえて西側の調査区に達するが、過去の開墾作業により消失している。住居との連結部約1mほどの間は、明確な暗渠となっていて、この部分には溝の付替えが1回認められる。新しい溝は、住居の中央穴にはつながらず、壁面近くの補助柱用の柱穴に接しており、排水用の機能をもっていたことを示している。連結部以外の溝中央部上層には暗褐色土が堆積していて、暗渠だったかどうか判然としない。この土層中からは多くの土器をはじめとする遺物が出土している。

S111 (Fig. 7)

調査区北端近くに位置する円形住居址。大半が里道下に存在し、調査できたのは南東の壁溝および床面部だけである。調査箇所からは柱穴は検出されなかった。直径は4.2m程度になると推定される。壁溝および埋土中から土器片が出土したがこれらはいずれも小片で実測可能なものはなかった。ただし、砂粒を多く含む特徴的な胎土からみて弥生時代中期に属すると考えられる。

調査区北西隅に検出したS112 (Fig. 3) も同様の住居址と考えられるが、ほんの一部のみの調査で、遺物が出土していないため、詳細は不明である。

S108 (Fig. 8)

調査区南端に位置する住居状遺構。斜面上方を削平して形成した、コの字形に巡る溝と平坦な床面が検出された。溝の北端は、松根の採掘坑によって破壊されている。床面中央には偏平な自然礫が置かれていた。また、床面南方で柱穴とみられるビットを検出したが、これは本遺構に伴うものではない。溝の南北長は2.3mを測る。溝から甕形土器の底部が出土した。弥生時代後期。

S104 (Fig. 9 上段)

S103の西側に隣接する桁行2間(4.0m)、梁行1間(1.0m)の建物址。柱穴の埋土中から多量の木炭片や灰が検出された。柱穴からは多くの弥生土器が出土した。この中には、同一個体を分割して別の柱穴に分けて埋めた例も認められる。これらの土器は柱を抜き取った後に意識的に埋納されたもので、P 6では同時に自然礫を埋めていた。本建物址は倉庫と思われるが、こうした柱

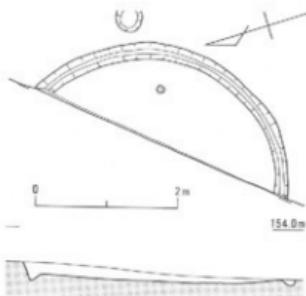


Fig. 7 SH111実測図 1:80

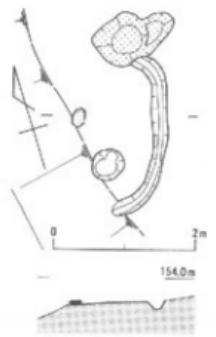


Fig. 8 SX108実測図 1:80



Fig. 9 SB104・109実測図（上段：SB104、下段：SB109）

穴内への土器埋納の諸類例からみて、本例もまた地鎮を目的とする祭祀行為と考えられる（註1）。本建物出土例で特徴的なことは、建物の別個の柱穴のみならず北側に隣接するSD105出土の上器片と接合する個体が認められることで（Fig.10, 4 + 70）ある。これは、本建物とSH103との同時存在を示すものと考えられる。

SB109 (Fig. 9 下段)

SB104の南方15mに位置する桁行2間（5.0m）、梁行1間（4.0m）の建物址。梁行が長いにもかかわらず、明確な妻柱痕は検出されなかった。建物方向はSB104と一致する。

2 A地区の概要（遺物）

本地区からは多量の土器をはじめとして、石製品、鉄器、鉄滓が出土した。これらの遺物については原則として可能な限り実測図を作成して掲載する方針で整理にあたった。土器はSH103などの弥生時代後期の遺構から出土したもののがほとんどで、なかには遺構埋土中から出土したものも少なくない。これら遺構に直接伴わない土器については実測図の掲載を一部省略したものもある。以下、土器、石製品、鉄器の順に概要を述べる。

SH102出土土器 (Fig. 10上段)

3個体の土器が出土した。1は壺形土器で、口縁端部は拡張せずに上方にわずかにつまみ上げて納めている。2は小形壺で、平底をわずかにとどめている。3の高壺形土器は短脚で、内外面に赤色顔料を塗布し、壺部上半が大きく立ち上がっている。

SH103・SD105出土土器 (Fig. 11-13)

SH103出土土器は、埋土中から発見されたもの（25-38）と床面出土のもの（43-62）に分けられる。埋土出土土器には壺（25、31-34）、甕（26-30）、鉢（35-38）、高壺（40-42）、器台形土器（39）がある。壺、甕形土器ともに叩き成形のもの（26、31・32）がある。25、30は現状では成形痕をとどめないが、叩き成形と思われる。鉢形土器には低い脚台をもつものが特徴的である。高壺形土器の脚台部もまた総じて低く、短い脚柱から明確に外方に聞く形態のもの（40・41）と、段をなさずに次第に開いていくもの（42）とに分けられる。39は鼓形器台の上半部で、外面の段は未発達で、胴部もあまり寸詰まりとはいえない。床面の土器には壺（43-45、49、50）、甕（47-48、50、60）、鉢（62）、手焙形土器（61）がある。壺形土器は大きく4類に分かれる。拡張した口縁部が内傾する43と、上方に立ち上がるがやや内傾した頭部をもつもの（44）とほぼ直立する頭部のもの（45）、そして短頭のもの（46・49）とである。ただし、46・49は甕形土器である可能性もある。これらのうち、45・46・49の外表には横描き沈線紋を施している。51は壺の胴部で、叩き成形による。底部のうち、53・57・58は甕、他は壺形土器のものと思われる。甕形土器でも47・50・57・58・60は叩き成形と考えられるものである。脚台59は鉢形土器のものであろう。56は手づくね形土器である。

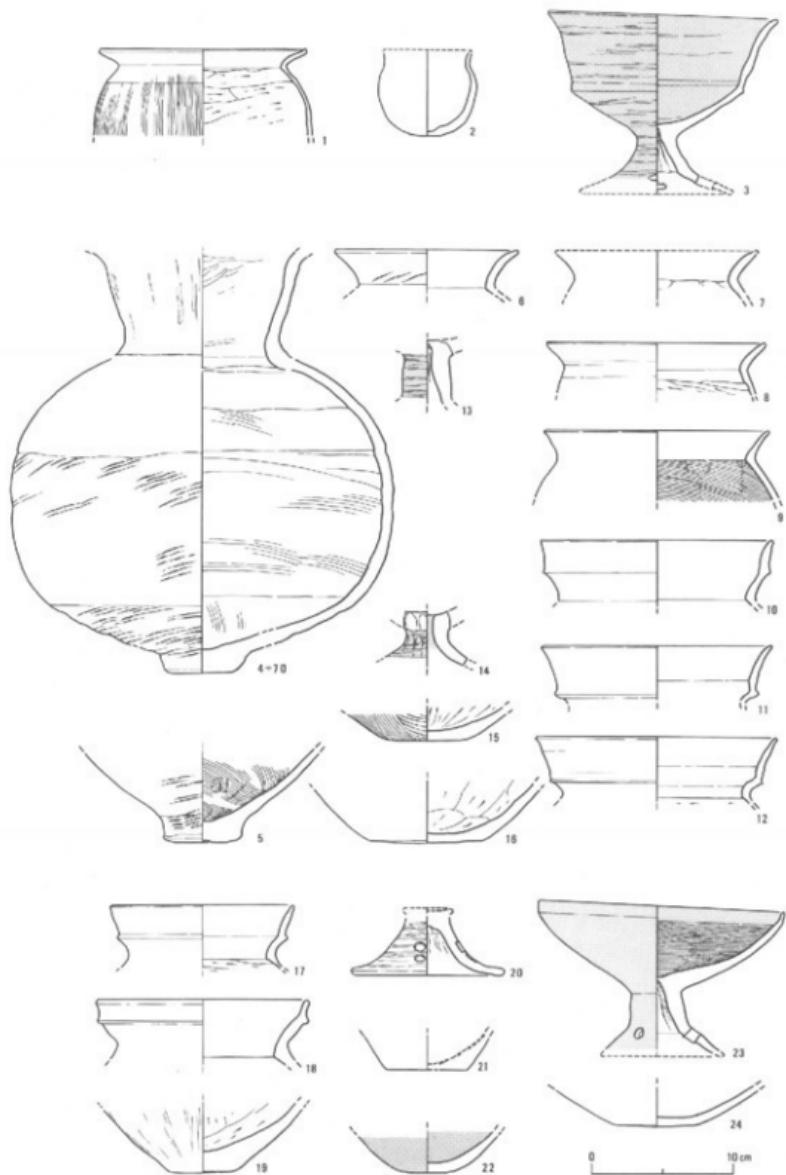


Fig. 10 土器実測図（上段：SH102床面、中段：SB104、下段：各区柱穴他）

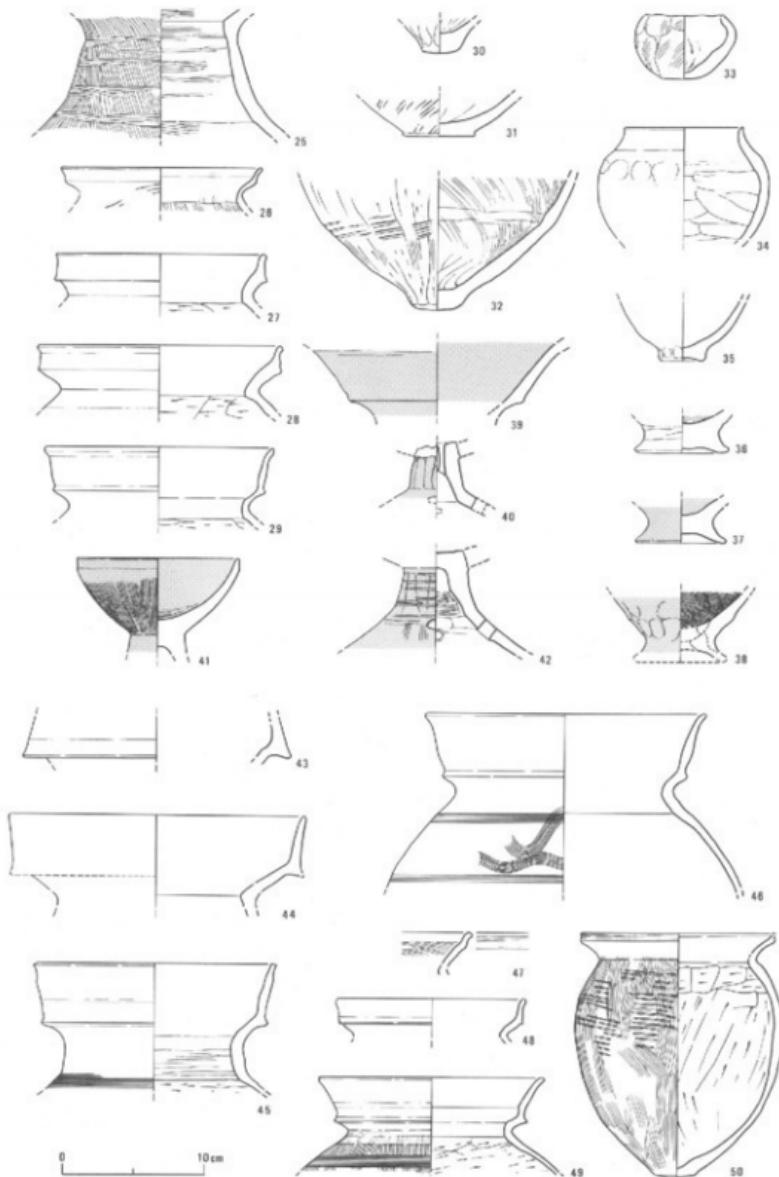


Fig. 11 土器実測図（上段：SH103埋土、下段：SH103床面）

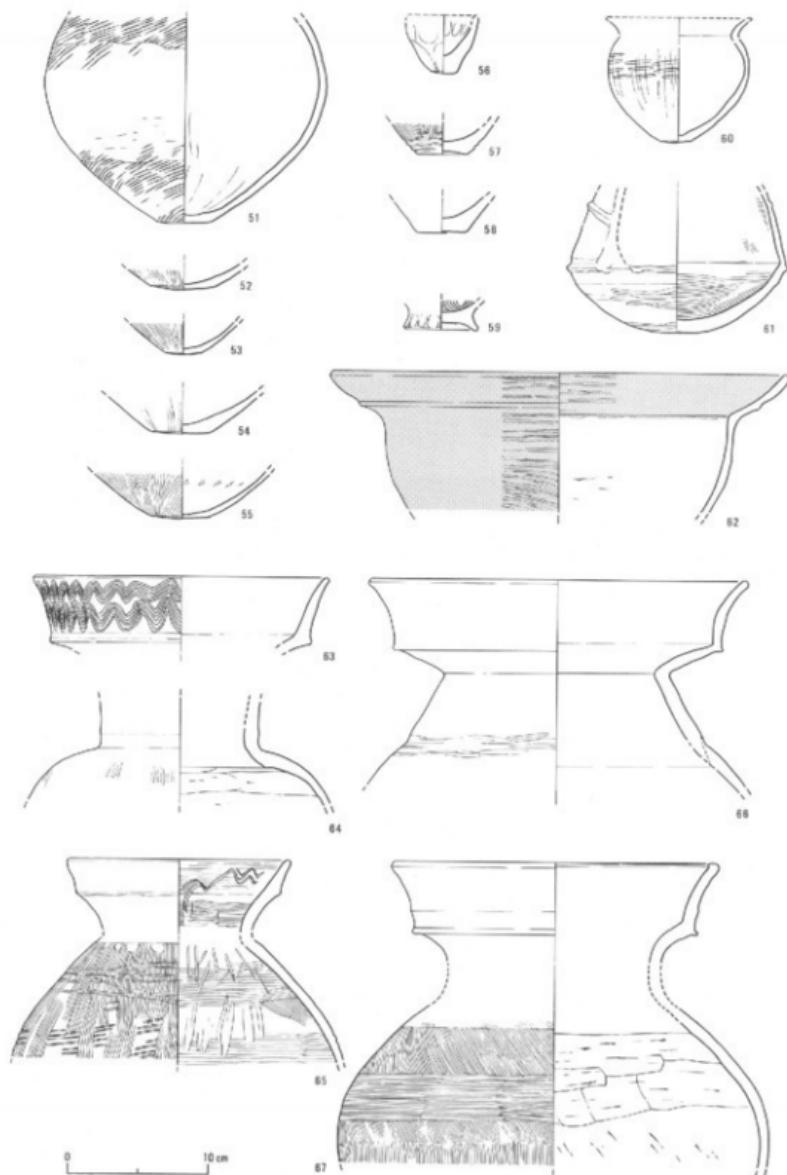


Fig. 12 土器実測図（上段：SH103床面、下段：SD105）

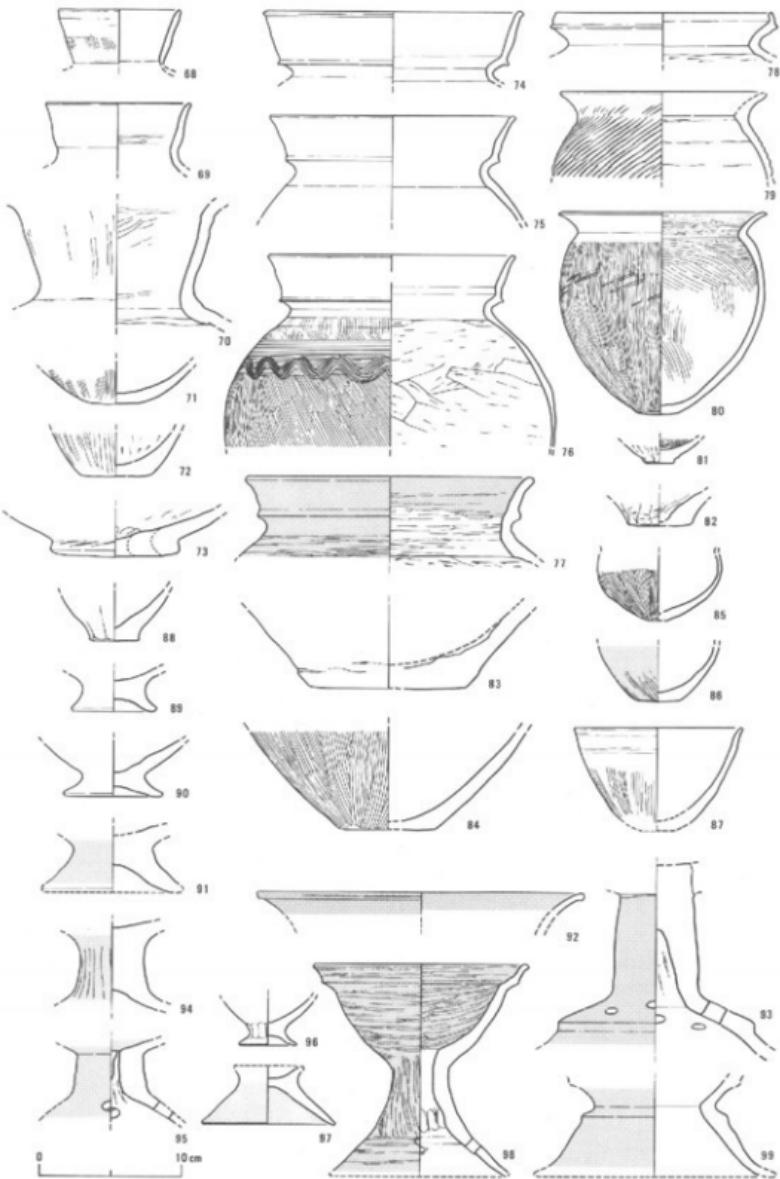


Fig. 13 土器実測図 (SD105)

SD105出土土器 (Fig. 11下段-12) は、遺跡の項で述べたように、溝の上部に堆積した暗褐色土層中から出土したものが大半で、したがって、これらはSH103の新段階の恐らく廃絶時期を示すものと思われる。しかし、この下層の黄褐色土層から出土したものも少量あって、発掘時にこれらの明確な区別はできなかった。ただ、66は溝の下底部に張り付いて出土し、67はSH103付近に新しく付け替えられた上層の溝から出土したことが明らかな例である。

壺、甕、鉢、高坏、蓋、器台形土器がある。壺形土器 (63-73・77・83・84) は、上半部の形態からみて体部と区別される明確な頸部から大きく開く口縁部をもつもの (63・64・66・67・70)、短頸のもの (65・77)、直口壺 (68・69) の三者に大別される。さらに前者は、頸部が内傾するもの、直立するもの、外傾するものに細分できる。これらの壺形土器のうち、65・70・73は叩き成形のものである。変形土器 (74-76・78・82) も、大きく立ち上がる二重口縁部をもつもの (74-76)、内傾しながら短く立つ口縁のもの (78)、外反してそのまま口縁部を納めるもの (79-82) の三者に分けられる。前者の76は、体部に櫛描き沈線紋を施す。後者はいずれも叩き成形のもので、81・82の底部外面をヘラ削りによって成形している。鉢形土器 (85-91・96) は底部の形状から、二者に分類される。平底をわずかに残したもの (85-88) と脚台をもつもの (89-91・96) である。高坏形土器 (92-95) は短脚のものが多いが、93は脚台部に段をもつ人形のものである。92の口縁端部はやや肥厚させて面をもつ。いずれの高坏も赤色顔料を塗布している。器台型土器 (98・99) は台付鉢状のものと鼓形器台とがある。鼓形器台 (99) 外面の段部稜線はやや丸みを帯びている。

SB104出土土器 (Fig. 10中段)

10・15がP 1、6・9・11がP 3、13・14がP 4、4・7・8がP 5、そして4・5・12・16がP 7から出土した。壺 (4・5・15・16)、甕 (6-12)、高坏形土器 (13・14) がある。4の壺胴部はP 5とP 7に分かれて出土し、さらに頸部 (70) はSD105から出土したものである。壺はいずれも叩き成形で、突出した特徴的な底部をもつ。甕は、大きく二者に分かれ、外方に折り曲げてそのまま納めた口縁部をもつものには叩き成形のものがみられる。

各区柱穴ほか出土土器 (Fig. 10下段)

以上の遺構の他にも、調査区内の柱穴群等から土器が検出された。17がE13区P 8、18がD 11区P 2、19がD 11区P 4、20・24がE 13区P 6、21がSX108、22がD 11区P 5、23がE 5区P 1からそれぞれ出土したものである。甕 (17・18)、壺 (19)、鉢 (22)、蓋 (20)、高坏形土器 (23) がある。いずれも弥生後期後半。蓋形土器の外表には凹形の刺突紋が施されている。

石製品 (Fig. 14)

石鎌、石庖丁、偏平片刃石斧、砥石がある。これらの他に、サヌカイトのチップ2点がSD105から検出された。



Fig. 14 石製品・鉄器実測図

石鐵（1）は、D 8 区内の小穴から出土したサヌカイト製の凹基式のものである。石庖丁（2）は、D13×P 6 から出土した。粘板岩製で、薄く剥離した 2 片が接合する。偏半片刃石斧（3）は、SD105 の上層から出土したもので粘板岩製。砥石（4～9）のうち、4 と 8 の石質は粘板岩で、他は流紋岩と思われる。いずれも目の細かい石材を用いている。4・5 は SH103 埋土から出土した。6 は同住居の旧柱穴上面、7 は同住居址排水溝上面、そして 8 も同住居の床面から出土したもので、これら 3 点の砥石は SH103 の新段階で用いられたものである。9 は SB104 の P 1 から出土した。

鉄器 (Fig.14)

鎌（10）と釘ないし革状鉄製品（11）が、いずれも SH103 の埋土中から検出された。その他に製鉄関連遺物として鉄滓が出土している。11 は埋土上層の暗褐色土層から鉄滓や須恵器とともに出土したもので、古墳時代後期、7 世紀前葉に属する。10 はそれよりも下層から出土しており、弥生時代のものである。

鉄滓は SH102 および SH103 埋没後の窪みに堆積した暗褐色土層から集中して検出された。いずれも拳の半分以下の大ささに分割された製練滓と思われるものである。出土したのは整理箱にして 1 箱程度の量にすぎず、この近くで製鉄作業が直接行われたのではなく、持ち帰って選別した後に廃棄したものと考えられる。

3 B 地区の概要

遺跡 (Fig.15)

南北 15m、東西 5～10m の範囲を調査した。調査区の西および南側は既存の道路によって破壊されており、東側は用地外である。遺跡は北に向かって傾斜した丘陵縁辺部に位置し、遺構の存在するのは調査区南側の最高所の平坦面 6 m 四方の範囲内である。

検出したのは、4 本柱の建物址 1 棟、2 条の溝、小穴群である。このうち、4 本の柱穴と浅い中央穴、その南西の溝は住居址を構成するものと考えられた。西側の柱穴から土器が出土した。

遺構はかなり削平を受けていて、本来、遺跡は北側を除く丘陵上面に広がっていたものと思われる。

遺物 (Fig.15)

煮形土器（100）は口縁部の破片で、口径 21cm を測る。筒状の頸部から水平に近く開き、さらに外方に開いた二重口縁で、装飾に富む。外面には 2 状の櫛描き波状紋を巡らせ、その下位に円形浮紋を配し、竹管紋で加飾する。竹管紋は口縁部縦面にも施されている。内面はヘラ磨

き調整を施した丁寧なつくりである。美作地方では類例を見ない。

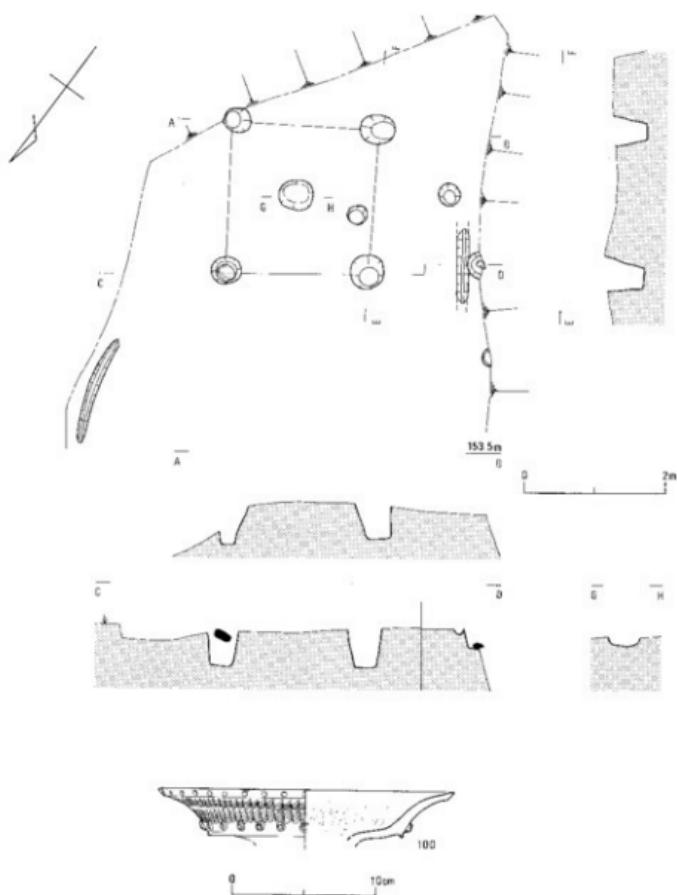


Fig. 15 B地区遺構・遺物実測図 1:80、1:4

III まとめ

ここでは、本遺跡の発掘調査によって判明した特徴ある事実について時期別に整理してまとめとする。

縄文時代 E14、E15において落とし穴を1基検出した。土器が出土していないので、所属時期の詳細は不明だが、東蔵坊遺跡B地区など周辺遺跡における断片的な資料からみて本地域一帯では当時、人々の活発な活動があったことが認められる。

弥生時代 中期の住居としてはSH111があげられるが、この周辺部E2区を中心に存在する柱穴群も同時期に属する可能性が高い。このように中期の遺構が本遺跡調査区の北端部に限られるのに対し、後期の遺構群はE5×P1を北端として調査区のはば全域に広がる傾向を示す。両者の間には後期的な隔たりがあり、継続して集落が営まれたのではない。

出土土器の大半は後期後葉に属し、住居址SH102・SH103およびその付属施設であるSD105から出土したものが主体を占める。これらの土器について検討を加える。遺構の切り合いから知ることができる最も新しい遺構SH102で、このうち1の壺は本地方では類似をみないもので、搬入品の可能性がある。SH102出土土器は小量で、所属時期については明らかにしないが、高坏(3)の高く立ち上がる坏部と、脚柱と脚台との境界の不明瞭な低脚部からみて、本地方の後期を5期に区分した津市大田十二社遺跡の編年(註2)に当てはめれば、大田5式頃のものであろう。これに先行するSH103・SD105とSB104の関係については、先にも触れたように同一個体である壺(4・70)の存在から両施設の廃絶時期の同時性が推定される。従って、これらの土器をほぼ同時期のものとして考えることが可能である。壺の口縁部形態をみれば、大田5式を基本として、大田4式とされたものも存在する。ただし、このことから本資料をただちに2時期に区別できるという確証は今のところない。確かにSD105上層出土の67の壺のような土器といつてよいもの的存在もあるが、それを除いた大半の資料はむしろ大田5期に属するのではないかと思われる。このようにみてくれば、本遺跡の後期土器は、畿内における庄内式併行期にはほぼ属するとみられる。ちなみにB地区出土の壺(100)はまさに庄内式そのものといえるもので、赤く発色した胎土からも搬入品と考えられるものである。このことと関連して、叩き目成形土器の存在が注意される。この成形法による土器は壺・壺両器種にわたり、全体に占める比率もかなり高いものとなっていて、なかには4・70のように搬入品とみられる土器も存在する。こうした傾向は大田十二社遺跡でも4期以降に観察されていて、本地域の弥生後期後葉の特徴のひとつとなっている。この様相がどのようにしてたらされたのかも今後検討すべき課題である。

本遺跡における特徴のもうひとつは後期住居の形態にある。特にSH101・103にみられる直径11m前後という大きさは、本地方でも弥生・古墳時代を通じて最大のクラスに属する。本時期の住居の平面形は、一部に隅丸方形のものを含むものの、基本的には円形をなす。次の古墳時代初頭においては方形に変化し、同時に小形化するようである。同時期における標準的な住居の規模とあわせて評価されなければならないが、住居の大形化傾向は、本時期においてピークをむかえるようである。直径11mという規模は、たとえば弥生中期後半の標準的な住居にみられる直径4mという規模に対し、面積では実に7.5倍に達することとなり、上屋構造のみならず、住居内部の構造あるいは利用形態もかなり異なっていたことが予想される。この点に関する整理・検討も今後の課題である。

古墳時代 SH102・103の埋土上層から出土した鉄滓については、先に述べたように生産の場から持ち込まれて二次的に廃棄されたものと考えられる。おそらく本調査区に隣接する未調査区に7世紀前葉頃の住居址等が存在するものと思われる。

註1 安川豊史「東藏坊遺跡B地区発掘調査報告」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集」1981他

註2 中山俊紀他「大田十二社遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集」1981 ただし、この編年では岡山県南部における危川上層式（布留式併行期）以降とその前（庄内式以前）との間に弥生・古墳時代の境界を置く立場に立つ。本稿でも同様の立場をとった。

図 版

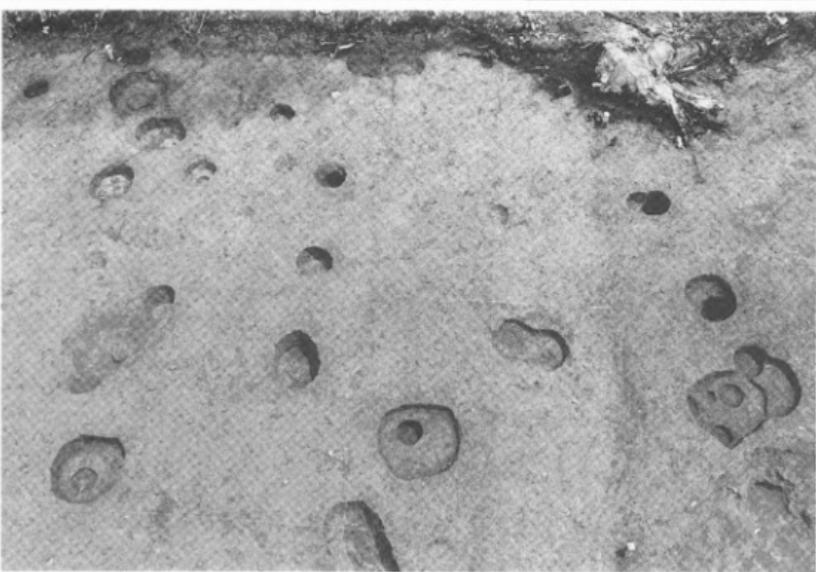
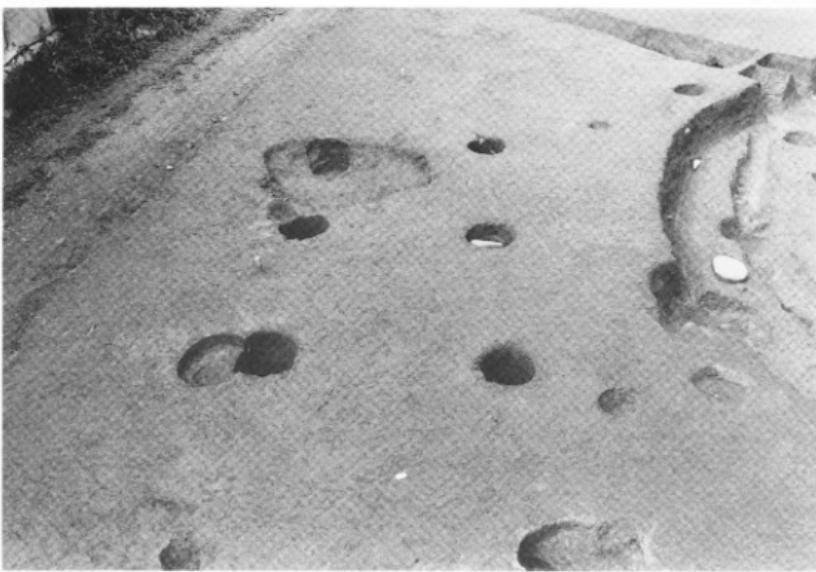




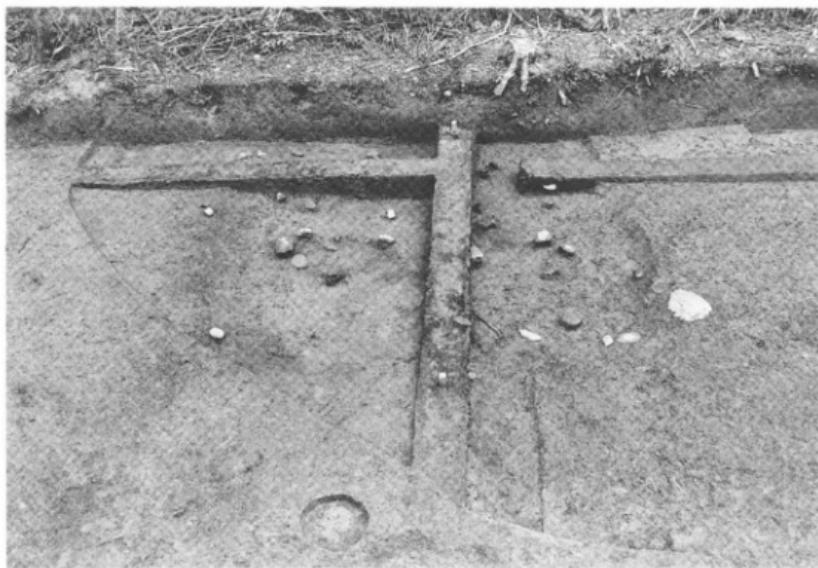
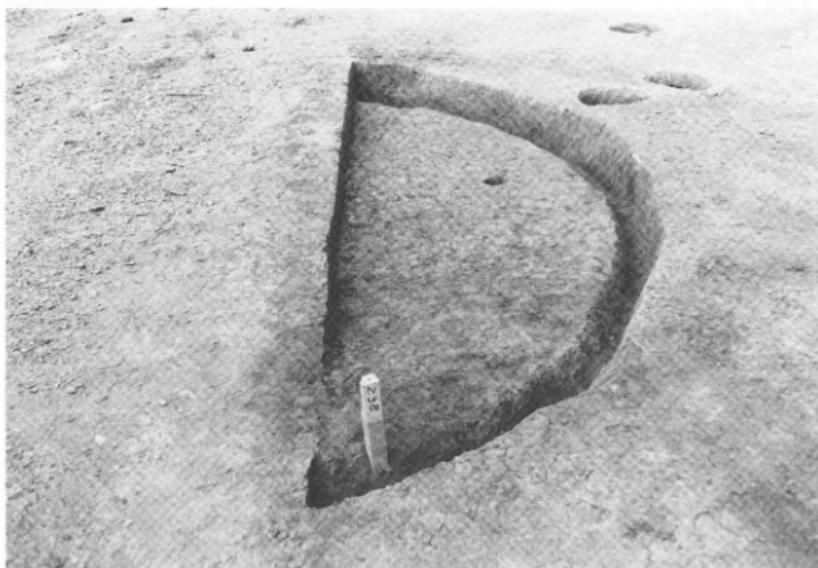
1. 上部遺跡全景 2. SB101(北から)



1. SH102・103(南から) 2. SH103中央穴埋土断面(西から)



1. SB104(南から) 2. SB109(西から)



1. SH111(南から) 2. SH103埋土上層鉄滓等出土状況(西から)



3



50



23



80



66



3 : SH102出土高坏, 23 : E5区P1出土高坏, 66~80 : SD105出土土器, 右下段 : 各区出土石器・铁器

上部遺跡発掘調査報告

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第30集

1990年3月31日

発行 津山市教育委員会
岡山県津山市山北520

印刷 宮 美 成
岡山県津山市平福177